

3
Rd.

JUNE 2012

RACING
PRESS
apan

2012 SUPER GT ROUND 3
SEPANG INTERNATIONAL CIRCUIT



SUPER

G

2012 Round 3 SEPANG

Editor
吉川 誠志

Photo
加藤 智充
中村 佳史
原 勝弘
高村 元子

SEPANG GT 300Km RACE 6/9-10



灼熱のセパンは対決は3メーカー三つ巴!



スーパーGT第3戦は、舞台をマレーシアに移し今季初の海外戦として、セパン国際サーキットで開催された。酷暑で知られるセパンサーキットは今年の気温も比較的に低く例年よりは曇りがちの天候。しかし、決勝は雲が少し取れたため、気温が一気に上昇しスタート時の路面温度は50度に達した。予選でも昨年引き続きウイグダHSVがポールを獲得。2番手にZENT SC430が3番手にはMOTUL GT-Rが入り3メーカーが上位に連ねた。

ウイダーHSVがポール・トゥ・ウィンで2年連続優勝!

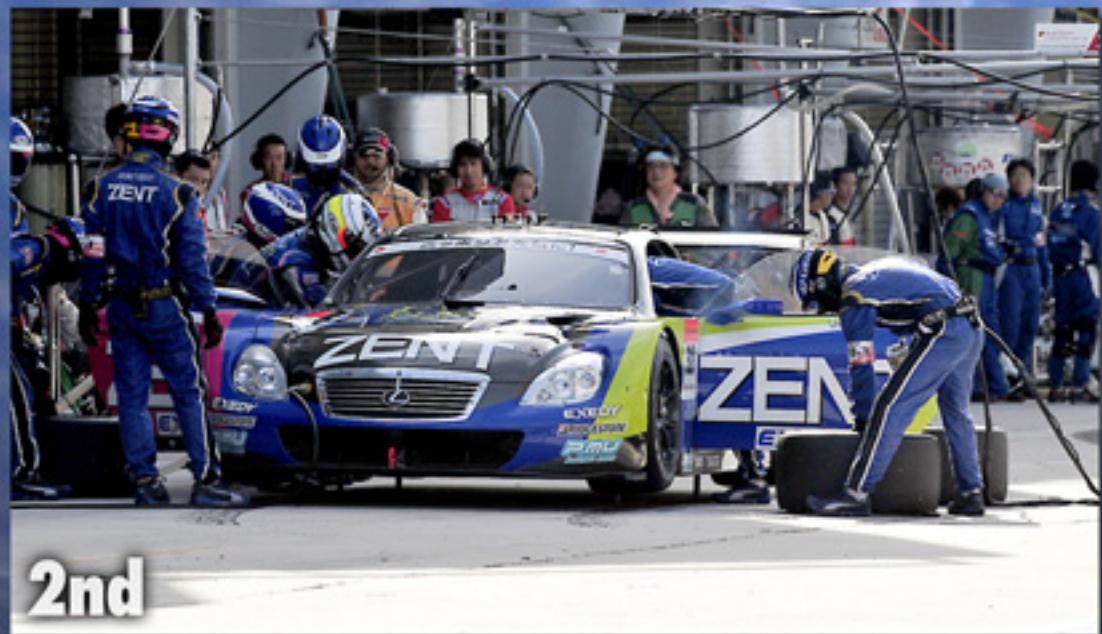


GT500
WINNER



GT500 決勝結果

優勝	No.18	ウイダー HSV-010	小暮卓史 / C.ヴァンダム
2位	No.38	ZENT CERUMO SC430	立川祐路 / 平手晃平
3位	No.6	ENEOS SUSTINA SC430	伊藤大輔 / 大嶋和也
4位	No.39	DENSO KOBELCO SC430	脇阪寿一 / 石浦宏明
5位	No.12	カルソニック IMPUL GT-R	松田次生 / J.P.デ・オリベイラ
6位	No.100	RAYBRIG HSV-010	伊沢拓也 / 山本尚貴



HANKOOK PORSCHEが完勝!



GT300





2nd



3rd



GT300 決勝結果

優勝	No.33	HANKOOK PORSCHE	影山正美 / 藤井誠輔
2位	No.911	ENDLESS TAISAN 911	峰尾恭輔 / 横溝直輝
3位	No.66	triple a vantage GT3	吉本大樹 / 星野一樹
4位	No.3	S Road NDDP GT-R	関口雄飛 / 千代勝正
5位	No.2	エヴァンゲリオンRT初号機アップル家電	高橋一穂 / 加藤寛規
6位	No.52	GREEN TEC & LEON SLS	竹内浩典 / 黒澤治樹

THE TEAM CLOSE-UP

Team RAYBRIG with KUNIMITSU

Text by M.Shimamura

Photo: T.Kato / Y.Nakamura

監督「国さん」は 世界の舞台で日の丸を センターポールに掲げた名選手!

サーキットで見かける姿は物腰もやわらかく、実に穏やか。若手ドライバーにとっては父親よりも年上の、だがおじいちゃんと言うにはまだ早すぎるという“ビミョー”な世代。ご自身は、54歳までフォーミュラレースに参戦していたキャリアもある偉大な人。GTレースに至っては、1999年、59歳までステアリングを握っていたのだから、その強靱な精神力たるや相当なものとお見受けする。

気難しい感じがしないからか、周りのスタッフがみな親しみをもって「国さん」と言うものだから、いつもは「監督」と形式ばって呼んではいるが、気がつくところらもつい、「国さん」と口にしてしまうほど。そんな国さんが率いるチームが、TEAM KUNIMITSU。1992年に自分の名前をつけたチームを発足させ、暫くは監督兼選手として活躍した。

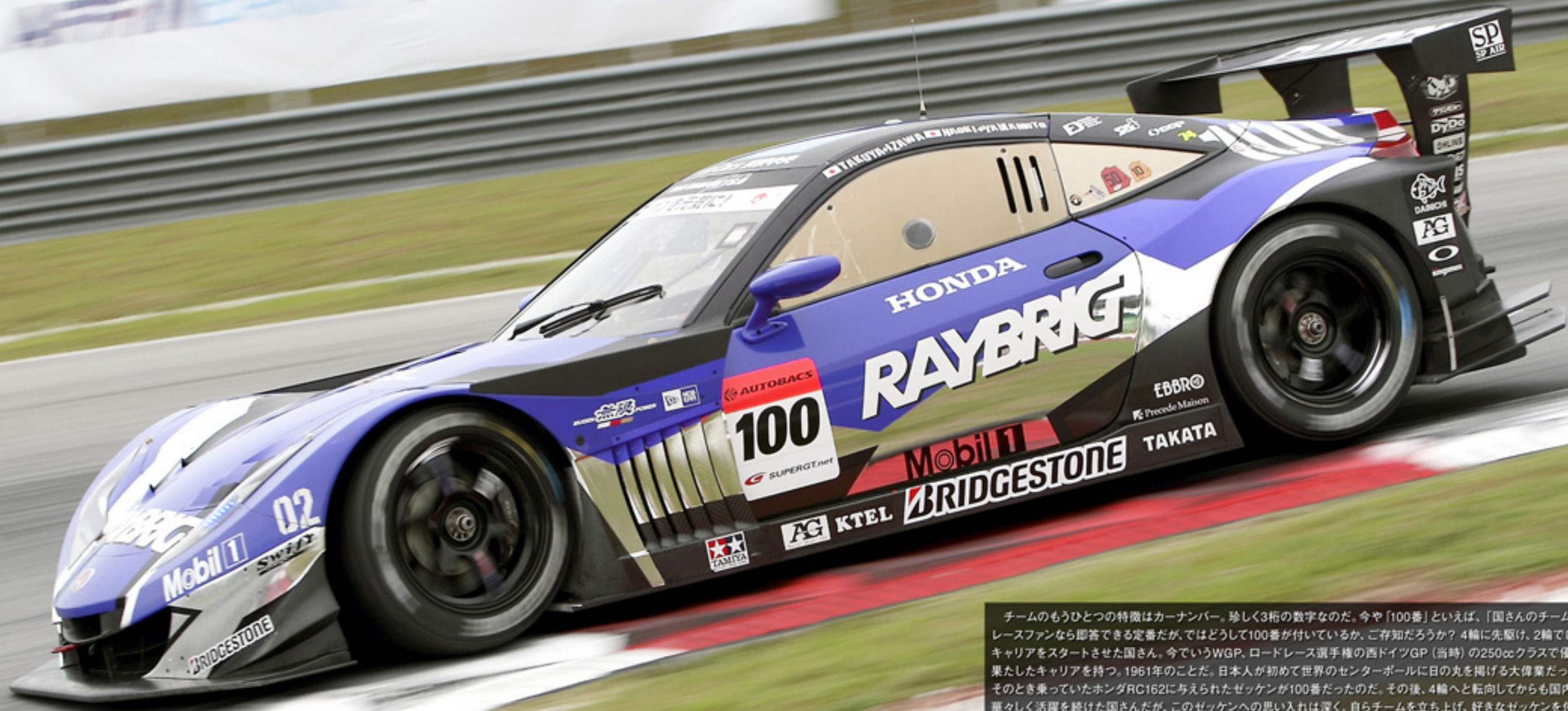


山本尚貴 選手



伊沢拓也 選手





チームのもうひとつの特徴はカーナンバー。珍しく3桁の数字なのだ。今や「100番」といえば、「国さんのチーム」とレースファンなら即答できる定番だが、ではどうして100番が付いているか、ご存知だろうか？ 4輪に先駆け、2輪でレースキャリアをスタートさせた国さん。今でいうWGP、ロードレース選手権の西ドイツGP（当時）の250ccクラスで優勝を果たしたキャリアを持つ。1961年のことだ。日本人が初めて世界のセンターポールに日の丸を掲げる大偉業だったが、そのとき乗っていたホンダRC162に与えられたゼッケンが100番だったのだ。その後、4輪へと転向してからも国内外で華々しく活躍を続けた国さんだが、このゼッケンへの思い入れは深く、自らチームを立ち上げ、好きなゼッケンを使えるようになったときには迷うことなくこの100番を選んだという。

チームスタッフも「100」という番号への思い入れも深く、不動の100番をつけて今日もサーキットを疾走する。とりわけ、伊沢拓也&山本尚貴という若手コンビ結成2年目の今シーズンは、もう少しで表彰台の真ん中に手が届くコンディションをキープしている。記憶に残る100番が、記録として残る期間は、もうまもなくかもしれない。